

中学校英語科における言語活動の更なる充実に向けた 遠隔授業の可能性の追究 ーインストラクショナルデザインに基づく授業設計を通してー

Investigating the Potential of Distance Teaching for Enhancing Language Activities in Junior High School English Classes - Through Lesson Design Based on Instructional Design -

塩月 一恵^{*1}, 小林 博典^{*2}, 興津 紀子^{*2}

Kazue SHIOTSUKI^{*1}, Hironori KOBAYASHI^{*2}, Noriko OKITSU^{*2}

^{*1}延岡市立土々呂中学校

^{*1}Totoro Junior High School

^{*2}宮崎大学教育学部

^{*2}Faculty of Education, University of Miyazaki

Email: z322205@student.miyazaki-u.ac.jp

あらまし：本研究では、中学校英語科における言語活動の更なる充実に向けて、教育学部で英語を専攻する大学生との遠隔による交流学习を行ってその成果と課題を明らかにし、遠隔授業の可能性を追究することを目的とした。授業設計においては ID の ADDIE モデル、ARCS 動機づけモデルに着目した。結果、「成功の機会」において事後が有意に向上し、「目的指向性」、「親しみやすさ」、「自然な結果」における向上に有意傾向がみられた。

キーワード：中学校教育、英語科、遠隔授業、インストラクショナルデザイン

1. はじめに

生徒の英語力向上の視点から、中学校英語科の授業においては、言語活動の更なる充実のために ICT 等の有効活用が求められている（文部科学省, 2017）⁽¹⁾。また、各学校においては、GIGA スクール構想（文部科学省, 2019）⁽²⁾の推進による児童生徒の 1 人 1 台端末整備と高速通信ネットワーク環境の下、遠隔授業を実施する環境が整いつつある。

本研究では、中学校英語科における言語活動の更なる充実に向けて、高速ネットワークや 1 人 1 台端末の活用などの GIGA スクール構想において整いつつある学習環境を活かすこととした。そこで、教育学部で英語を専攻する大学生との遠隔による交流学习を行ってその成果と課題を明らかにし、遠隔授業の可能性を追究した。授業設計においては、ID の ADDIE モデル、ARCS 動機づけモデルに着目した。

2. 研究の方法

2.1 学習者・交流相手と実施期間、単元名

学習者と遠隔授業にかかる交流相手、実施期間、単元名は表 1 のとおりであった。

表 1 学習者・交流相手と実施期間、単元名

学習者	公立中学校 3 年生 36 名
交流相手	教育学部の英語を専攻する大学 4 年生 11 名
実施期間	2022 年 11 月 15 日(火)～17 日(木), 11 月 22 日(火), 24 日(木)の計 5 回
単元名	「あなたの町を世界に PR しよう」 (開隆堂 SUNSHINE ENGLISH COURSE3)

2.2 環境構築

遠隔での学習場面には、生徒と大学生でブレイクアウトセッションを用いたグループ単位での Small Talk ができる環境を構築するため、Zoom を用いた。活動においては、ハウリング発生への対応として生徒にはそれぞれの端末にヘッドセットを装着させた。単元を進めるにあたっては、生徒と大学生の交流にロイロノート・スクールという授業支援システムを用いた。学級内における活動では、授業冒頭の目標設定や授業終末での振り返りに Google Classroom を用いた。

2.3 ADDIE モデルの各段階と授業設計にかかる内容の対応

授業設計にあたっては、表 2 のとおり内容を検討した。

表 2 ADDIE モデルの各段階と授業設計にかかる内容の対応

段階	内容
分析	生徒への質問紙調査による事前調査 教科担任へのインタビューによる学習者の分析と手立ての整理
設計	単元計画の作成、学習指導案の作成
開発	教材の準備、対象校と大学の事前接続の実施 遠隔授業での学習活動をスムーズに行うための方法の検討
実施	検証授業の実施
評価	分析、設計、開発、実施段階での見直し、生徒への事後質問紙調査

2.4 質問紙調査による事前・事後調査と分析方法

事前調査では,1)生徒の実態を把握するため学習指導要領や教科書をもとに筆者が作成した項目と,2)川上・向後(2012)⁽³⁾の Course Interest Survey 日本語版尺度を援用した項目,3)英語スピーキング抵抗感尺度(磯田 2008)⁽⁴⁾を参考に筆者が作成した項目を設定した.加えて検証授業にあたり,楽しみなことや不安なことを問う自由記述を設定した.事後調査では,2),3)に加え,検証授業を受け生徒自身が気付いたことや感想をまとめるための自由記述を設定した.質問は5件法で実施し定量的データとして扱った.

事後調査の自由記述の分析では,はじめに,記述内容を成果と課題に分けて整理した.次に,回答結果で示された内容が似ている事項を一つに集約して整理し,具体的な記述内容を箇条書きにして記すとともに,それぞれの記述内容に対する回答数を付して整理して,項目ごとにキーワードを付けて表にまとめた.さらに,KH coder 3.Beta.03i(樋口 2020)⁽⁵⁾の共起ネットワークを用いて計量テキスト分析を試みた.これらの一連の作業を共同研究者にも同様に実施してもらい,観点の違いやずれがないかを確認し,客観性を担保した.

3. 結果と考察

事前・事後の質問紙調査の結果について,Wilcoxonの符号付き順位検定により分析した.また,事後の自由記述について成果と課題をまとめ(表 3),共起ネットワークを作成した(図 1).

「成功の機会」にかかる設問「英語の授業では,自分の活動への取組がどのくらいうまくいっているかを知るために途中で意見をもらっている。」($M_{事前} = 2.75, M_{事後} = 3.28, p < .01$)について,事後が有意に向上した.「目的指向性」にかかる設問「英語の授業で学習した内容は私にとって役に立つだろう。」($M_{事前} = 4.22, M_{事後} = 4.38, p < .1$),「親しみやすさ」にかかる設問「英語の授業で,私はこれまでに学習した知識を活かしながら活動に取り組んでいる。」($M_{事前} = 3.69, M_{事後} = 4.03, p < .1$),「自然な結果」にかかる設問「英語の授業では,活動への取組の結果がどうだったか,自分自身で振り返ることができる。」($M_{事前} = 3.19, M_{事後} = 3.63, p < .1$)について,事後における向上に有意傾向がみられた.

成果と課題の分類及び共起ネットワークから,生徒は大学生との遠隔授業に対し楽しさを感じ,好意的に受け止めていること,また,大学生とのコミュニケーションの中で得たアドバイスを自身の活動に活かしたいという前向きな気持ちが喚起されていることが示唆されていた.一方で,PR 動画作成時や英語でのやり取りには,伝えることに対する難しさを感じていたことが確認された.

4. まとめと今後の課題

本研究では,中学校英語科における言語活動の更なる充実に向けて,教育学部で英語を専攻する大学生との遠隔による交流学习を行ってその成果と課題

表 3 事後の自由記述にみる成果と課題の分類

項目 (件数)	主な具体的内容
楽しさ(20)	ふだんかかわりのない人との授業が受けられて楽しかった。 近くにいらなくても大学生と話せて楽しかった。
体験からの学び(17)	大学生からのアドバイスをこれからの活動に活かしたい。 大学生と話して自分がどれくらい英語ができているか分かった。 僕も大学生のみさんのような発表ができるようになりたい。 知らなかった文の工夫の仕方を知り,おもしろいと思った。
英語で話したいという意欲(4)	英語で話したいと思うきもちが強くなった。
学び方(4)	ロイノート感想記入はふだん発表しない人の意見が聞けて良かった。 遠い場所からでも授業が受けられて便利。
伝える難しさ(14)	人に英語で物事を伝えるのは難しいと思った。 自分が伝えたいことを文に起こすのが難しかった。 自分の気持ちを英語で話すのが難しかった。
英語力(6)	自分で思ったよりも今までに学んだことを活かすできなかった。 大学生の会話,PR ビデオの発表のとき緊張した。 授業での発言が少なかった。
回線(4)	回線が悪くやりづらいときがあった。
配慮(1)	たくさんの先生から見られたこと。

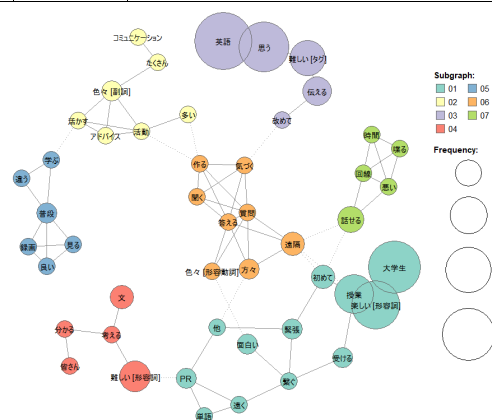


図 1 事後質問紙調査自由記述の共起ネットワーク

を明らかにし,遠隔授業の可能性を追究することを目的とした.なお,授業設計においては,ADDIEモデル,ARCS 動機づけモデルに着目した.

生徒に対する授業前後の質問紙調査の結果,「成功の機会」において事後が有意に向上し,「目的指向性」,「親しみやすさ」,「自然な結果」における向上に有意傾向がみられた.生徒の自由記述からは,学習に対する楽しさなど興味・関心を喚起し,体験に基づく学びの深まりが確認された.一方,生徒の「能力」「不安」にかかる認識への課題については,継続的な手立てを講じ,今後更なる検証が必要である.

参考文献

- (1) 文部科学省: “中学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説外国語編” (2017)
- (2) 文部科学省: “GIGA スクール構想の実現について”, https://www.mext.go.jp/a_menu/other/index_00001.htm (参照 2023.2.4)
- (3) 川上祐子, 向後千春: “ARCS 動機づけモデルに基づく Course Interest Survey 日本語版尺度の試作とその検討”, 日本教育工学会研究報告集 Vol.12, No.4, pp.103-110 (2012)
- (4) 磯田貴道: “英語スピーキング抵抗感尺度の作成”, 広島外国語教育研究 Vol.11, pp.41-49 (2008)
- (5) 樋口耕一: “社会調査のための計量テキスト分析[第 2 版]-内容分析の継承と発展を目指して-”, ナカニシヤ出版, 京都(2020)